The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新出土資料関係文献提要（一）
Author(s)	佐野, 大介; 前川, 正名; 上野, 洋子
Citation	中国研究集刊. 2003, 33, p. 91-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60970
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新出土資料関係文献提要（一）

佐野大介　前川正名　上野洋子

前言

本解題は、近年の新出土資料に関する文献について、その解説を試みたものである。今回は、郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）、上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）に関する文献を主対象とした。なお、その内容・形態から、関係書籍を便宜的に「一、図版（写真版）・釈文」「二、文字」「三、釈文」「四、邦訳書」「五、研究書及び論文集」「六、雑誌類」の六部に分類した。また、本解題内において用いている「文物本」・「古籍本」との略称は、それぞれ郭店楚簡及び上博楚簡の基本となる図版・釈文を掲載した『郭店楚墓竹簡』と『上海博物館蔵　戦国楚竹書』とを指している。

〔一、図版（写真版）・釈文〕

『郭店楚墓竹簡』（荊州市博物館編、文物出版社、一九九八年五月、二三〇頁、縦組繁体字）

郭店楚簡の写真、及び、翻刻と注釈を収めた書。郭店楚簡とは、一九九三年湖北省荊門市郭店一号楚墓より出土した竹簡群のことである。本書には、その有字簡の全て（七三〇枚）が次のように収録されている。

「老子（甲・乙・丙）」「太一生水」「緇衣」「魯穆公問子思」「窮達以時」「五行」「唐虞之道」「忠信之道」「成之聞之」「尊徳義」「性自命出」「六徳」「語叢（一・二・三・四）」。

このように郭店楚簡には古逸書が多数含まれており、「五行」以外は篇題も記されていない。それぞれの篇名

は編者によって命名された仮称である。

本書の構成は、「図版（写真版）」と「釈文　注釈」とに分かれる。釈文は（　）等の記号を使用し、各々の釈文を行なっている。また、釈文の後に若干の注釈を附している。

また、初期段階での釈文であるため、注釈はやや簡略で、未釈・待考として保留されている部分もあり、それらについては後続の注釈書・研究書によってかなりの補訂がなされている。いくつかの欠点は指摘されているものの、現在、郭店楚簡研究の底本とされている。類似の書に張光裕主編『郭店楚簡研究第一巻文字編』（芸文印書館、一九九九年一月）がある。

（前川正名）

『上海博物館蔵　戦国楚竹書』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇一年十一月～、縦組繁体字）

上博楚簡の図版（写真版）と釈文とを収載した書。上博楚簡の有字簡全一二〇〇余枚、三五〇〇〇余字を収録予定。「図版」と「釈文考釈」との二部より成る。平成十五年六月現在、第二巻まで発行されており、その内容は以下の通り。第一巻、「孔子詩論」「紂衣」「性情論」。第二巻、「民之父母」「子羔」「魯邦大旱」「従政（甲篇・乙篇）」「昔者君老」「容成氏」。

「図版」（写真版）はカラー写真を用い、各篇ごとに竹簡全体の写真を用いて配列したパートと、原寸を三・六五倍に拡大した写真を頁毎に一簡づつ掲載したパートとの二部より成る。サイズの異なる写真が二種類掲載されていることによって、当該簡の全体像と各々の文字の形体との両方を確認することが可能となっている。

また、「釈文考釈」では、先ず「説明」として当該篇の簡単な解説を附した後、簡ごとに白黒写真を載せ、当該部の釈文を附す。さらに、当該簡の釈文を数句に分けて一句ごとに提示し、それに対してかなり詳細な注釈を附している。なお、この注釈は、文字の隷定・釈読に関する説明や語句説明などを中心とし、類似する文章が伝世文献に存在すれば、その指摘などもなされている。

また、例えば「孔子詩論」では、附録として、上博簡の『詩』の篇名と伝世本のそれとを対照した表や、上博簡が載す『詩』の各篇に対する孔子の批評と『毛詩』の小序とを対照した表が附されており、「性情論」や「紂衣」では、上博簡の当該篇の竹簡写真及び釈文と郭店楚簡のそれとを並べて対照した表が附されているなど、使用者の利便性を考え様々な工夫がなされている。

本書に収載された写真版は全ての上博簡研究の基礎となるものである。また釈文も、鑑定・保存など楚簡購入当初より携わったメンバーの手になるものであり、本書は上博簡研究の出発点となるものといえよう。

（佐野大介）

『簡帛書法選』（『簡帛書法選』編輯組編、文物出版社、二〇〇二年～、図版部縦組繁体字・釈文部縦組簡体字）

簡牘や帛書などの、春秋戦国より魏晋に至る時期に成書されたと考えられる出土資料の図版（写真版）と釈文とを収載した叢書。同社の『歴代碑帖法書選』の続編にあたる。選目は以下の通り。『曾侯乙墓戦国簡』・『包山楚簡』・『郭店楚墓竹簡』（全十五冊）・『睡虎地秦簡』・『江陵秦簡』・『馬王堆漢簡・遣策』・『馬王堆帛書・老子』（乙本）・『武威漢簡』・『銀雀山漢簡』・『江陵漢簡』・『定県漢簡』・『尹湾漢簡・神鳥傳』・『長沙三国呉簡』。

本叢書は、書法を鑑賞することを目的としたものであるため、収録されるのは当該出土資料の一部であることが多い。しかし郭店楚簡については、ほぼ各々の篇ごとに単行されており、刊行は全十五冊が予定されているため、全ての篇が収録されると予想される。

以下、郭店楚簡のシリーズに関して述べる。その内容としては、図版（写真版）部は、一頁あたり竹簡一本が掲載されており、竹簡一本分の全体写真と拡大写真とを載す。更に、拡大写真の横には釈文も附されている。写真が二種類掲載されていることによって、当該簡の全体像と各々の文字とを確認することが可能となっている。なお、図版部に附されている釈文は文物本を底本としており、句読点が省かれている他は、隷定・読替などは文物本のそれと同一である。釈文部は、大まかな文意を確認することを重視してか、読替後の文字を使用し、かつ簡体字によって表記している。また各冊の最後には、「説明」として、当該篇の簡単な紹介が附されている。

本書は、いわば文物本の図版と釈文とを単行したものであり、各篇ごとに単行されているという点では利便性も高いといえる。ただ、文物本の釈文に附された裘錫圭氏の「注釈」は収載されておらず、研究目的で使用する際には注意が必要である。

（佐野大介）

[二、文字]

『郭店楚簡研究』第一巻　文字編（張光裕主編、袁国華合編、陳志堅・洪娟・余拱璧助編、芸文印書館、一九九九年一月、七四〇頁、縦組繁体字）

文物本を底本とし、郭店楚簡文字の釈読をまとめた字書。主に、①「文字編（正文・合文・待考文）」②「索引（部首・画数・合文）」③「原簡与釈文対照図版（含残簡）」④「釈文」から成る。

①「文字編」は、郭店楚簡に見える文字を『康熙字典』に従い配列したもの。各文字には本書における統一番号（正字一～一三四四、合文一～二二、待考字はなし）を付し、a楷書体、b小篆（基本的に『説文解字』と合致するもの）、c原簡字写真（「原簡与釈文対照図版」と対応した簡号を付す）、d例句を載せる。dでは、読み替えた文字を（　）で、欠文を補った文字を【　】で表示する。③「原簡与釈文対照図版（含残簡）」は、原簡写真の横に手書き釈文を加えたもの。④「釈文」は、③の手書き釈文を活字にしたもので、読本として活用できる。

本書は「文字編」でありながら楚簡内容が同時に参照でき、逐字索引として使えば該当文字を含む全竹簡番号が一目で分かる。また、③の手書き釈文は文物本釈文と異なるため、本書は対校本としての特色も持つ。しかし、釈文に注釈がないため、釈文確定の根拠はわからない。

本書と張守中氏『郭店楚簡文字編』の相違として挙げられるのは、張守中氏が類似字形を一項にまとめているのに対し、本書は類似字形も全て載せている点、張守中氏と比べて釈読に積極的な点である（断定を避けた文字数は、張守中氏が五三字、本書は十二字）。

なお、本書の主編者である張光裕氏と香港中文大学図書館による「郭店楚簡資料庫（http://bamboo.lib.cuhk.edu.hk/）」がインターネット上で公開されており、郭店楚簡の釈文が検索できる。また、本書の緒言によれば第二巻は『疏証』、第三巻は『研究』が予定されている。

（上野洋子）

『郭店楚簡文字編』（張守中・張小滄・郝建文撰集、文物出版社、二〇〇〇年五月、二二八頁、縦組繁体字）

文物本を底本とし、竹簡文字の釈読と用例をまとめた字書。巻末の検字表（画数索引）によって文字検索ができる。本書は「単字」「合文」「存疑字」「残字（文字の濃淡によって認定が難しいもの）」の四部構成。収録字数は、「単字」一二二六字（重文二四一一字）、「合文」二一例（重文十一例）、「存疑字」五三字（重文十一字）、「残字」七字。

文字配列は『説文』によるが、『説文』所収文字の場合、その見出し字として『説文』の小篆を挙げ、下に楷書文字を付す。(『説文』にないものは見出し字として楷体隷字を挙げる。)その下には楚簡で使用されている文字の写真を複数並べており、同字内での字形比較もできる。各楚簡文字の下には篇名と簡号、用例数を付す(例えば「老甲一二二」は「老子」甲本第二二簡、「緇五　九例」は、「緇衣」第五簡用例数が計九ということ)。「存疑字」については、釈読も未確定のものであるため、存疑字を含む一定範囲の句も引用している。

本書のように郭店楚簡の文字を分類・配列した字書は、古文字、特に戦国の楚文字資料を研究する上で実用性が高く、同時に現在刊行が進められている上海博物館蔵戦国楚竹書の研究にとっても有益である。同社出版の関連書としては、『包山楚簡文字編』『睡虎地秦簡文字編』などがある。

(上野洋子)

[三、釈文]

『郭店楚簡　儒家佚籍四種釋析』(出土思想文物与文献研究叢書(一)、丁原植著、台湾古籍出版有限公司、二〇〇〇年十二月、四三一頁、横組繁体字)

郭店楚簡儒家系文献の中でも佚籍とされる「性自命出」「成之聞之」「六徳」「尊徳義」四篇の研究書。釈文と詳細な解説をまとめる。

各篇冒頭の「説明」では、竹簡情報、要旨、原釈文(文物本)の段分けと本書独自の段分けを明示する。例えば「性自命出」の場合、原釈文では九段(1)簡一―七(2)簡八―十八…)のところを、本書釈析では八段(第一章、簡一―十五:第二章、簡十五―十八…)としている。

各篇では、まず「原釈文」(文物本)を示し、次の「釈文整理」で独自の配列と釈読を行う。釈読は基本的に文物本の釈読に従っているが、独自に読み替えた箇所もある。そして、郭店楚簡の理論構造を具体的に解説する「全篇釈析」では、まず各段の要旨を述べてから釈文を載せ、具体的な解説に入っていく(この釈文は、文物本の原釈文と釈読を「釈文整理」の配列に従って並べ直したもの。時々簡号の区切りに誤りが見られるので、文物本も確認する方がよい)。図解を交えた丁寧な解説は、郭店楚簡の論理構造を理解する上での一助となっている。

その他の特徴としては、「付録」の佚籍四篇竹簡拡大図

版がある。一頁につき二簡（各簡三行に分断）ずつ載せ、各頁上部に原釈文を付したもので、図版と釈文を対照できる。単なる釈読書で終わらず、出土資料細読のための工夫が随所に見られる書である。

（上野洋子）

『郭店楚簡先秦儒家佚書校釈』（出土文献訳注研析叢書　P012、涂宗流・劉祖信著、万巻楼図書有限公司、二〇〇一年二月、四三八頁、横組繁体字）

郭店楚墓竹簡の儒家系文献十四篇に対する釈文及び注釈。各篇ごとに、冒頭に「按」（該当の篇に関する簡単な説明）を附し、次に篇全体をいくつかの意味上の段落に分け、各段落ごとにその釈文に対して「注」（当該段落の文章に類似する伝世文献の文章の指摘や字形に関する解説）・「釈」（一句ごとに対する語句・内容の解説）を附す。文字の釈読・竹簡の配列などの他、篇章の名称や分章、さらには篇の枠組み自体にも独自の見解を提出する。

その内容としては、文字に関しては、文物本で釈読がなされていなかった文字に対しても釈読を行ない、また、文物本において釈読がなれているものでも、別に独自の釈読を施すものもある。また、篇章の名に関して、文物本の「魯穆公問子思」は「魯穆公」と、「成之聞之」は「君子於教」と名づけられている。

その他、各篇の内部で竹簡の配列が変更されているほか、「語叢」に対しては、さらに、篇の枠組み及び名称の変更がなされており、「語叢二」は「礼生於情」、「語叢四」は「慎言訣行」と名づけられている。また、「語叢一」と「語叢三」を併せて一篇として内部で竹簡の配列を変更し、それを上下篇としており、上篇を「天生百者」、下篇を「父子兄弟」と名づけている。なお、「釈」の最後には、「句意」として現代文による内容の要約が附されており、読解の参考になる。文物本と共に、郭店楚簡の儒家系文献を読む際には基本となる文献の一つといえるであろう。

（佐野大介）

『郭店楚簡校読記（増訂本）』（李零著、北京大学出版社、二〇〇二年三月、二四四頁、横組繁体字）

郭店楚墓竹簡全十八篇に対する釈文及び注釈。同氏の「郭店楚簡校読記」（『道家文化研究』第十七輯、陳鼓応編、一九九九年）を大幅に改訂したもので、「附録」として著者の論文四本と「引用書目索引」・「詞語索引」とを附す。

各篇ごとに、先ず当該の篇に関する簡単な説明を附し、次に独自の釈読・竹簡の配列を施した釈文をあげる。さらに、「校読」（文字の釈読に関する説明）・「補注」（前作に改変・増加した箇所に関する説明）・「余論」（内容に関する解説及び問題提起等）を附す。また、篇には独自の名がつけられているものも多い。

本書の大きな特徴として、郭店楚簡の篇章を分類する際に、思想内容による分類よりも、字体や竹簡の形式の違いといった形状による分類を先行させること、があげられる。本書は、この観点から郭店楚簡全篇を五組に分類しており、通常儒家系文献とされる「語叢四」が、「道家和道家陰謀派的文献」と名づけられた「第一組」に分類されている。

また、「余論」の内容は、文字の認定から各篇の内容の検討や、さらには思想史上の位置づけの提示にまで及ぶものがあり、単なる解説に止まらず、当該の篇に関する論文といった様相を呈している。なお、「詞語索引」は、釈文の他、「補注」・「余論」など著者の解説部分におけるその字句の使用箇所までカバーしており、郭店楚簡の使用字句検索のみならず、内容からの検索等にも役立つ。

（佐野大介）

『上博楚簡三篇校読記』（丁原植主編、李零著、万巻楼図書有限公司、二〇〇二年三月、一七九頁、横組繁体字）

『上海博物館蔵戦国楚竹書』第一分冊に収録された「孔子詩論」「緇衣」「性情」三篇の「校読記」、及び関連論考資料を収めた書。本書の「校読記」とは、李零氏による釈文と注釈を指す。全体は、第一部分「上海楚簡校読記」、第二部分「相関論文」、「附録」の三部構成。

本書の特徴として、第一部分内には「上海楚簡校読記（之一）――《子羔》篇〝孔子詩論〟部分」という篇題が見られるが、これは「子羔」「孔子詩論」「魯邦大旱」三篇が本来連続しており、「子羔」を首巻とする一巻の体裁をなしていた、という古籍本との共通見解を反映させたものである。（文物本三篇は馬承源氏が担当。文物本「孔子詩論」の「説明」に「本篇与《子羔》篇及《魯邦大旱》篇的字形、簡之長度、両端形状、都是一致的、一個可以選択的整理方案是列為同一巻。我們発現在《子羔》篇第三簡的背面有巻題為《子羔》。……現按整理前後先発表《詩論》。」とある。）

第二部分「相関論文」は、「郭店楚簡校読記《緇衣》」・「郭店楚簡校読記《性自命出》」・「参加〝新出土簡帛国際学術研討会〟的幾点感想」よりなる。前二篇は、郭店

楚簡「緇衣」「性自命出」の釈文及び注釈で、前掲『郭店楚簡校読記（増訂本）』の再掲（これらについては、前掲『郭店楚簡校読記（増訂本）』解題参照）である。従って、これらを用いて郭店楚簡「緇衣」「性自命出」と上博楚簡「緇衣」「性情」双方の釈文を対照することが可能となっている。附録「作者校訂後釈文」は、本書「校読記」が最終的に確定した釈文のみを収載しており、通読の便を図っている。

『郭店楚簡校読記』のような「詞語索引」はないものの、文物本と異なる釈読や竹簡配列を提示する異本として、その価値は高い。

（上野洋子）

［四、邦訳書］

『郭店楚簡の思想史的研究』（東京大学郭店楚簡研究会編、東京大学中国思想文化学研究室、第一巻、一九九九年十一月、全一五三頁。第二巻、一九九九年十二月、全一四四頁。第三巻、「古典学の再構築」東京大学郭店楚簡研究会編、二〇〇〇年一月、全二二四頁。第四巻、二〇〇〇年六月、全一六六頁、第五巻、二〇〇一年二月、全二三六頁。第六巻、二〇〇三年二月、全一五三頁。横組和文）

郭店楚簡各篇の訳注を収載した書。第一巻に「魯穆公問子思」「五行」「唐虞之道」、第二巻に「性自命出」「成之聞之」、第三巻に「緇衣（上）」、第四巻に「緇衣（下）」を収めている。また、訳注以外にも、関係論文、上博楚簡に関する情報（第二巻）、郭店楚簡に関係する文献目録（第三・四巻）等を掲載している。第五巻、第六巻は、論文集である。

訳注の底本には、文物本を用い、詳細な注釈を付記する点に特徴がある。

なお、郭店一号墓の造営時期については、多くの副葬品の考古学的編年から、戦国中期（紀元前三百年頃）とするのが一般的な見解であるが、本書の論文編は、郭店楚簡各篇の成立時期が戦国末期であることを前提としたもの、及び、戦国末期説を補強する論文が多く載せられている。

類似の書には、池田知久『郭店楚簡老子研究』（東京大学中国思想文化学研究室、一九九九年十一月）、大東文化大学郭店楚簡研究班『郭店楚簡の研究』（大東文化大学大学院事務室、一九九九年八月～）がある。また、第一巻の「「魯穆公問子思」訳注」「「五行」訳注」「「唐虞之道」訳注」、

第二巻の「「成之聞之」訳注」、第三巻・第四巻「「緇衣」訳注」、および、第一巻の「郭店楚簡『魯穆公問子思』の忠臣観について」、第二巻の「郭店楚簡『五行』の研究」、第三巻の「郭店楚簡緇衣篇攷」「郭店楚簡『窮達以時』の研究」「中国古代の「遇不遇」論」、第五巻の「郭店楚簡『唐虞之道』における「道の四術」」「郭店楚簡『唐虞之道』の堯舜禅譲説と中国古代の堯舜継承説話の研究」は、『郭店楚簡儒教研究』（汲古書院、二〇〇三年二月）に再録されている。

（前川正名）

『郭店楚簡の研究』（大東文化大学郭店楚簡研究班編、大東文化大学大学院事務室、第一巻、一九九九年八月。第二巻、二〇〇〇年九月。第三巻、二〇〇一年三月。縦組和文）

郭店楚簡各篇の訳注（第一巻「太一生水」「窮達以時」・第二巻「魯穆公問子思」「忠信之道」）、関係論文（第一・三巻）、関係文献目録（第一・二巻）等を収めた書。大学院ゼミの成果をまとめたものである。訳注の底本には文物本を用いている。また、本書の論文は、書道史と思想史に特化している。

なお、三巻の「あとがき」によれば、訳注編として、第四巻の刊行が予定されている。また、第二巻の「忠信之道」訳注は、『郭店楚簡儒教研究』（汲古書院、二〇〇三年二月）に再録されている。

（前川正名）

『郭店楚簡儒教研究』（池田知久編、汲古書院、二〇〇三年二月、縦組和文）

郭店楚簡の内、儒家系文献に対する訳注と論考とをまとめた書。「訳注編」「論文編」の二部より成り、さらに「郭店楚墓竹簡関係論著目録」を附す。訳注編は、「緇衣」「魯穆公問子思」「五行」「唐虞之道」「忠信之道」「成之聞之」の六編の訳注を、論文編は郭店楚簡の儒家系文献各々に対する専論七編を収載している。これらは、雑誌『郭店楚簡の思想史的研究』第一～五巻に発表された儒家系文献に関する訳注や論文、及び『郭店楚簡の研究』一に発表された「忠信之道」訳注を再録したものであるが、各々若干の改訂が施されている。郭店楚簡に関しては、本邦においても公開当時より注目され、内容に関する論文の発表数は現在かなりの数に及ぶ。しかし、まとまった形での和訳（訓読及び口語訳）の単行は本書が初めての試みである。これら訳注の発表は、本邦の楚簡研究

に裨益するところが大きく、研究の基盤整備という点においてもその意義は大きいといえよう。

また、編者による「序文」一～三は、郭店楚簡に関する紹介となっており、和文によるまとまったものとしては本邦初のものである。そのうち、「四、『郭店楚簡』を読むための工具書」は、『汗簡』『古文四声韻』より近年出版された工具書に及ぶ、楚系文字を読むための工具書の紹介・解説となっており、郭店楚簡・上博楚簡などの楚竹簡を扱う者、およびこれから扱おうとする者にとって非常に有益である。

（佐野大介）

［五、研究書及び論文集］

『本世紀以来出土簡帛概述（資料篇、論著目録篇）』（出土文献訳注研析叢書P002、駢宇騫・段書安編著、万巻楼図書有限公司、一九九九年四月、二〇八頁、横組繁体字）

二十世紀に発見された出土資料を解説した書。資料篇と論著目録篇とよりなる。

資料編は、一九〇〇～一九〇一年の「尼雅遺跡」に始まり、一九九六年の「湖南長沙走馬楼三国簡」まで、出土（発見）順に、遺跡および出土資料の概要紹介がなされている。

郭店楚簡は、一九九三年の「湖北荊州郭店1号楚墓」にて、上博楚簡は、一九九四年の「上海博物館従香港購得戦国楚簡」にて、紹介されている。郭店楚簡、上博楚簡の紹介としては早期のものである。

論著目録篇は、著作目録と論文目録とよりなる。著作目録は一九〇〇年～一九九九年まで、論文目録は一九一六年～一九九八年までの文献情報をそれぞれ収めている。

このように、二〇世紀発見の出土資料に関する情報を幅広く収集しており、歴史・思想・文字など広範な領域の研究情報として便利な書である。

（前川正名）

『上博館蔵戦国楚竹書研究』（上海大学古代文明研究中心・精華大学思想文化研究所編、上海書店出版社、二〇〇二年三月、四七九頁、横組繁体字）

上海博物館蔵の戦国楚竹書に関する研究書。研究ノート、釈文、論文、研究論文目録等より成る。目録（目次）によれば、大きく七部（「序」を含む）に構成されており、四〇名の研究者によって四四（「序」と「本書作者名録」

とを除く）本の論考が載せられている。

第一部は「序」、第二部は上博楚簡に関する談話と「孔子詩論」の簡介の二本、第三部は主として「孔子詩論」に関する論文であり、七本を載せる。第四部も主として「孔子詩論」に関する論文であり、六本を載せる。第五部は「孔子詩論」に関するものと、上博楚簡に関する札記類と、合わせて二〇本を載せる。第六部は、主として「緇衣」篇に関する論文八本を載せる。第七部は、「上博館蔵戦国楚竹書研究論文目録」と「本書作者名録」とである。

上博楚簡に関する研究書として、かなり早い時期のものである。また、「孔子詩論」に関する論文が多数載せられていること、「緇衣」篇に関する論文がまとめて載せられていること、に本書の特徴がある。

（前川正名）

『従《郭店簡》探求其倫常観念』（林素英著、万巻楼図書有限公司、二〇〇三年一月、二二七頁、横組繁体字）

郭店楚簡儒家系文献に表れた服喪思想・倫理思想に関する研究書。全六章。

第一章「研究的動機与目的」では、郭店楚簡の現在の研究概況を解説し、さらに本書の構成・研究手法・研究目的などに関する解説を行なう。

第二章「《郭店簡》服喪措施適文化意義」では、『儀礼』『礼記』などとの比較を通して、「六徳」篇の服喪に関する記述を検討する。

第三章「従「三親不断」到孟子「五倫」説適拡張性人倫関係」では、「六徳」篇において重要な人倫関係とされる概念である「三親」について、伝世文献に見られるターム、「三族」や「五常」「五教」「五典」などとの比較から、郭店楚簡における倫理思想について考察する。

第四章「「六位」与其職徳的人倫関係転折」では、『六徳』にみられるターム、「六位」「六職」「六徳」の論理構造と相互関係とについて考察する。

第五章「従「六徳」到「四行」、「五行」的「三重道徳」」では、郭店楚簡にみられる三つの倫理規範の分類形式である、「六徳」篇の「六徳」、「五行」篇の「四行」及び「五行」を「三重道徳」と称して様々な考察を加える。

第六章「従「三重道徳」的倫常観念検視《郭店簡》的服喪措施及其現代倫常意義」では、前章までの考察を踏まえ、郭店楚簡に表れた倫理思想について、『論語』『孟子』に記された具体的な倫理行動との比較、さらには現代における意義についての考察を行なう。

本書は古代中国の服喪制度や死生観を専門とする著者によって、一貫したテーマに沿って体系的に記述された研究書である。郭店楚簡に関しては、複数の著者による論考を集めた論文集は数多く発行されているのに対して、一人の著者による研究書の発行は少なかったが、これより、本書のような研究書が増えることが予想される。

また本書は、郭店楚簡の文献自体の内容に対する考察を行ない、さらにその上で思想史における一資料として取り扱っている。これは、考察を楚簡の内部で完結させず、思想史上に位置づける作業であるといえる。本書の発行と、そこに示された研究手法とは、郭店楚簡研究が全体として一歩前進したことを示しているといえよう。

（佐野大介）

『楚簡儒家性情説研究』（出土文献訳注研析叢書P015、丁原植著、万巻楼図書有限公司、二〇〇二年五月、三五八頁、横組繁体字）

郭店楚簡「性自命出」と上博楚簡「性情論」とを中心に、楚簡における性情説について論じた書。本書の内容は「序」「郭店楚簡《性自命出》原釈文」「上海博物館蔵楚簡《性情論》原釈文」「郭店簡《校読記》校訂本釈文」「上博簡《校読記》校訂本釈文」「資料辨析与解義」「付録（一、楚簡性情説的資料問題」「二、楚簡"性情説"哲学語詞釈析」「三、楚簡"性情説"」「資料対照」「参考書目」「郭店簡《性自命出》放大図版」）である。

本書は内容上二部に分かれ、前半は、郭店楚簡「性自命出」と上博楚簡「性情論」との釈文を載せた後、「資料辨析与解義」にて本文の解釈、及び両者の差異を論じている。後半部となる「付録」は、主として楚簡の性情論に関する論文である。

また、本書の著者・丁原植氏は先に『郭店楚簡儒家佚籍四種釈析』（文献研究叢書、台湾古籍出版有限公司、二〇〇〇年十二月）にて、郭店楚簡「性自命出」の解釈（《性自命出》篇釈析）を行っており、同氏による「性自命出」の解釈はそちらに詳しい。一方、上博楚簡「性情論」の解釈は、李零氏の『上博楚簡三篇校読記』（出土文献訳注研析叢書、万巻楼図書有限公司、二〇〇二年三月）に「上博楚簡校読記」がある。

（前川正名）

『大久保隆郎教授退官記念論集　漢意とは何か』（大久保隆郎教授退官記念論集刊行会編、東方書店、二〇〇一年

十二月、八六七頁、縦組和文）

「漢心とは何か」という統一テーマによる記念論文集。全四一本の内、冒頭の四本が郭店楚簡の関係論考である。郭店楚簡の特集を企画されてのものではないが、国内における論文集で四本の関係論文が掲載されたのは初のケースである。

浅野裕一氏「郭店楚簡『唐虞之道』の著作意図―禅譲と血縁相続をめぐって」は、「唐虞之道」における禅譲中心の理想的統治形態に注目し、それが作者のどのような意図から生まれたのかを検討している。

福田哲之氏「郭店楚簡『語叢』（一・二・三）の文献的性格」は、釈読困難とされる「語叢」の文献的性格を考察した論考。先学の見解に検討を加えながら、他の郭店楚簡との関係にまで言及し、「語叢」の特色を捉える上で有益な枠組みを提示する。

湯浅邦弘氏「「忠臣」の思想―郭店楚簡『魯穆公問子思』について」では、「魯穆公問子思」の忠臣像に焦点を当て、その思想的意義を検討する。『墨子』『孝経』『晏子春秋』『管子』『呂氏春秋』などの諸思想における「忠」と諫諍の関係の中から「魯穆公問子思」の思想的位置づけを図っている。

渡辺大氏「郭店楚簡『成之聞之』『六徳』にみえる人倫説について」は、「成之聞之」「六徳」の人倫説を、主に『孟子』との関係から考察する。『孟子』などの伝存文献と「成之聞之」「六徳」を対照し、郭店楚簡人倫説の成立、更には「子孟学派」という従来の思想的位置づけの妥当性にまで言及している。

（上野洋子）

〔六、雑誌類〕

『郭店楚簡研究（《中国哲学》第二十輯）』（遼寧教育出版社、一九九九年一月、四一一頁、横組簡体字）

『郭店簡与儒学研究（《中国哲学》第二十一輯）』（遼寧教育出版社、二〇〇〇年一月、四五〇頁、横組簡体字）

郭店楚簡研究の論文集。一九八八年に釈文が公開された後、『中国哲学』の特集号としていち早く刊行された論文集である。第二十輯は郭店楚簡特集号。三四本を収録する。器物や墓主に関する考察、『老子』『子思子』などに関する所感（「初読」「略説」「札記」など）が多い。また、巻末には国際討論会の概要がまとめられている。（「国際儒聯首次楚簡研討会」「美国"郭店《老子》国際研討会"総述」「《郭

店楚墓竹簡》学術研討会述要」）

続編となる第二十一輯は二三本を収める。「郭店楚簡研究（十七本）」と「儒学研究（六本）」の二部構成。概説や札記のほか、前輯と比べ各篇に対する基礎研究が多い。中でも、前輯と本輯の論考で提起された問題点や主張をまとめた姜広輝氏「郭店楚簡与原典儒学――国内学術界関于郭店楚簡的研究（一）」「郭店楚簡与早期道家――国内学術界関于郭店楚簡的研究（二）」は、郭店楚簡の成立年代や思想に関する当時の研究動向を確認する際有益である。

（上野洋子）

『中国出土資料研究』（中国出土資料研究会、一九九七年三月～、縦組和文）

中国出土資料学会の機関雑誌。「論文」・「訳注」の他、「書評」・「論著目録」・「研究動向」などより成る。年一回刊。本学会は、出土資料を用いる多様な分野の研究者が集うことにより、中国哲学・中国史学といった従来の枠組を越えた学際的な研究を進めること、を目的としている。

郭店楚簡に関しては第三号に小特集があり、また、第六号のシンポジウム「出土資料学への研究」に関する報告において、楚簡を中心とした特集が組まれている。各々の時点で最新の研究や報告が収載され、郭店楚簡に限らず出土資料研究の現況を知るためには必須の雑誌である。また、出土資料に関して、時に相い対立する様々な意見を収載しており、我邦唯一の出土資料を専門とする雑誌として、その存在意義は小さくないといえよう。

（佐野大介）